

---

新しい実験モデルによる門脈圧亢進症および

硬変肝に類似する肝細胞変化に関する研究

---

[ 5 5 7 1 7 5 ]

昭和 56 年度科学研究費補助金（一般研究 C）研究成果報告書

昭和 57 年 3 月

研究代表者      菅 原 武 久      （ 旭 川 医 科 大 学 ）

研究分担者      な し

はじめに：

硬変肝を組織学的に観察すると、twin cell plate、多核肝細胞等がみられ、これらの肝細胞異型は、肝細胞の active proliferation を示す細胞学的な所見とみなされている。つまり、肝硬変症では肝再生刺激が持続しているものと思われる。一方、硬変肝結節はその周囲を線維性隔壁によってとり囲まれており、そのため結節内の肝細胞は物理的に再生肥大の余地が制限されているものと考えられる。すなわち、硬変肝結節内の肝細胞と、それをとり囲む線維性隔壁との間には、互いに拮抗する圧力関係があるものと推測される。このような圧力関係が、肝硬変症における門脈圧亢進や肝細胞異型の出現に関係あるのではなかろうかと私は考えた。そこで硬変肝結節に類似する圧力関係を作製するために、ラットに70%の肝葉切除を行ない、再生能の旺盛な残存肝をガーゼで包み、物理的に肝再生を抑制する実験モデルを考え出した。そして、われわれの作業仮説を支持するような結果を得た。

## 研究組織

研究代表者：菅原武久（旭川医科大学医学部・講師）

## 研究費

|        |          |
|--------|----------|
| 昭和55年度 | 2,300 千円 |
| 昭和56年度 | 500 千円   |
| 計      | 2,800 千円 |

## 研究発表

### （1）学会誌

1. 菅原武久他、物理的な圧迫に対するラット部分切除肝の反応、肝臓、21 巻7号、1980。

2. 菅原武久他、物理的再生抑制肝に出現する liver cell atypia、肝臓、21 巻 9 号、1980。
3. 菅原武久他、肝内脈管系の一部離断に対するラット肝の反応 - 門脈圧亢進と肝内門脈枝吻合 -、肝臓、21 巻 11 号、1980。
4. 菅原武久他、物理的再生抑制ラットにおける血液生化学的因子について、肝臓、22 巻 5 号、1980。

(2) 口頭発表

1. 岩田光高他、肝硬変類似の病変をもたらす新しい実験モデルについて、第 67 回日本消化器病学会総会（東京）、1981 年 3 月。